

## バークリ『視覚論』は連合説か？

原昭

「・・・・・ナラシムラ・・・・ナラシムラ、知覚論の理論、あなた、我々の知覚がどのように発達するかといふ問題の説明を大体、「豊富説」(enrichment theory) と「専化説」(specificity theory) の二つに分類します。

豊富説は感覚と知覚を、感覚器を通じて送り込まれた感覚入力(sensory input) と、最終的な知覚内容( percept) とに区別し、前者よりも後者の方が我々をとつまむ世界についての情報をよつとく領むことの前提となるべく、両者の間の差違を、補足(supplementing)、解釈(interpreting)、体制化(organizing)などとよんで説明します。ナラシムラ達によれば、すべての知識の起源は経験にあり、現在の経験には過去の経験が混入してこねてある経験主義、連合主義の心理学ばかりでなく、連合主義に対する批判として登場したゲシコタルト心理学

無秩序な感覚と体制化された知覚との間の不一致の説明をめざす理論として豊富説に分類される<sup>(2)</sup>。

一方、ギブソン達の自説である分化説では、知覚内容においてすべて刺激入力(stimulus input)の内に今までおり、知覚が豊かになってゆくのは、より多くが弁別されるようになることによるのであって、過去の感覚の記憶や痕跡が付加されることによるのではないとされる。もつとも、知覚の発達が分化によるという考え方が既にゲシュタルト説にも見られる<sup>(3)</sup>ことをギブソン達は認めている。

豊富説が分化説かという分類にしたがえば、G・パークリが一七〇九年に出版した『視覚論』、とりわけ、そこに展開された奥行知覚に関する論考は、豊富説に分類されるべき理論として読まれてきた。具体的には、奥行をはじめとする三次元の空間的性質は、純粹に視覚によってのみ得られる情報のうちには一切含まれておらず、我々が三次元の視覚空間を知覚するようになるのは、触覚を通じて得られる三次元空間に関する情報と、奥行を欠いた一次元的な視覚像とが経験によって連合した結果であるとする理論、すなわち、連合説として理解されてきたと言つてよい。以下の論考においては、しかし、豊富説もしくは連合説による『視覚論』解釈には重大な問題点があることを示したい。

「・S・H・ルは、「一般にパークリの理論と呼ばれているが、実際には当代の形而上学者達の公認を受けた学説」<sup>(4)</sup>を簡潔に、

バークリ『視覚論』は連合説か？（原）

眼を通じて獲得される情報は一つのものから成り立つてゐる。すなわち、感覚とその感覚からの推論である。感覚は、そもそもに配列された色と、色の変化にすぎない。他はすべて推論、つまり知性の働きであつて眼の働きではない。あるいは、普通の言い方に申わせて、その働きを眼に帰するならば、眼がそれを「行つのは、本来の能力によってではなく、獲得された能力、つまり、眼が推論、推断能力を用いる」とて發揮する能力によつてである。<sup>(5)</sup>。

ヒューリックで要約している。補足すれば、「視覚は我々に本来は光と色以外には何も伝えない」<sup>(6)</sup>、その光と色は「一次元的にしか存在しない」<sup>(7)</sup>。視覚本来の情報を含まないといふことは、経験に基づいて推論され、判断される。「経験が行つるのは、判断の瞬間的な働きを感覚印象に付加する(superradd)」<sup>(8)</sup>といふ。「視覚の獲得された能力によつて見いだされる」といふが、視覚が感覚としての本来の能力によつて見るものと等しく直接に知覚されるように思われる<sup>(9)</sup>が、それは推論の過程があまりにもすばやく行われる「から」生じる誤りである<sup>(10)</sup>。

実際、バークリは次のように述べている。

距離はそれ自体直接には見えないと云ふ人が同意するに私は思ひ。ところでも、距離は眼に向かつて真つ直ぐに引かれた線であるから、眼底に一点しか投影せず、この点は、距離が長くても短くとも、常に同じであるから<sup>(12)</sup>。

……、視覚(vision)を正確にかつ混乱なく體づけためには、眼が感知(apprehend)する対象とは、一種類あつて、一方は第一次的に直接的に、他方は、前者の仲介によつて第一次的に感知されるところのいとを心に留めておかねばならない。第一種の対象は、心の外、すなわち、距離をおいて離れたといひにさせぬ、また、あるところにも見えない。たしかに、それらは大きくなつたり小さくなつたり、色や形たりはつきつたり、かすんだりはするが、それらが我々に近づいたり我々から遠ざかつたりする」とせなこし不可能である。ある対象が距離をおいてあるとか、それが近づいてくる、おなじせよつ離れておくと我々が直感的ではこゝでや、我々は後の種類の対象を意味してこね止むがこなれ。そして、それは本来触覚に属してこゝで、出しつけ眼に知覚されぬところもねいへ、耳に聽かれて内面が示唆(suggest)されたのに似た方ほど、眼に示唆されたものである(50)。

我々が目を開けば必ずそれら「視覚対象」によつて、距離、物体、触覚上の形(tangible figures)の觀念が示唆される。視覚の觀念から触覚の觀念への移行(transition)が非常に素早く、不意に、知覚されないため、それが等しく視覚の直接対象である直接対象となり得るわけである(145, [ ] 又繪解)。

第50節で言われる、第一種の対象(『視覚論』では「視覚の直接対象」(immediate object of sight)、「視覚」固有な対象」(proper object of sight)、おなじせ單に「視覚対象」(visible object)、「視覚の觀念」(idea of sight)の語

「*光と色彩*」(light and colours)<sup>(12)</sup> は、(77, 103, 129, 130, 156, 158)。

バークリーが、視覚対象は光と色であるから、それをもつてゐるが、心の外に存在するものではない。光と色との視覚対象が心の中の存在するものではない。(77, 111, 119)。つまり、視覚と視覚以外の感覚(『視覚論』)で問題となるのは、視覚に触覚であるが、この間に共通の観念が一切ないといひるのである(127, 129)。

これは「表象説」では、外界には存在する同一の事物について得た観念は、視覚と触覚の二つに異なる感覚を通じて得られたにせよ、共通の原因を持つことになる。私は第一次性質の観念であつて、それを知覚する主体を離れて、つまづ、心の外に独立して存在するにせぬ(= cf. 43)。しかし、視覚を廻りつて、見ていて、事物の、数形、大きさ、運動といった第一次性質の観念を得られ、それとの観念は、同一の事物について触覚を通じて得られる観念と共にあらわれ(= cf. 130)。バークリーは、このものは表象説に立った場合の観方を、「ある物体の延長や形は、一つの道かい、それも視覚と触覚の二つの異なる観念に入つてゐるが、我々は自分たちが触れるのと同じ延長、同じ形を既にこころにうなづく瞬わねる」(48) と軽く表してゐる。

これに対し、バークリー自身は、「視覚によるて知覚せられる延長、形、運動は、回つぬ間に呼ばれる触覚の観念とは種的によつて、両方の感覚に共通な観念、あるいは共通な種類の観念といふものやうといつてやが」(127, cf. *TWV*, sect. 44) (12) と主張する。されば、視覚の観念と触覚の観念とは、共通の外的(物質的)原因はない。このいふのである、「同じ事物が視覚と触覚の両方に作用するに都合のせ語つてある」(136) などいふことはある。

第50節は、「のゆうに」種的に異なる」一つの觀念のうち、触覚の觀念はその原因を心の外に、すなわち、距離をおいたところに持つと述べており、触覚についてはバークリーも表象説にしたがつてゐる（cf. 45, 55, PHK, sect. 44）<sup>(13)</sup>。一方、視覚の觀念が心の外には存在しないこという点は、表象説での第一次性質と同じであるが、外界にある対象、つまり触覚対象が視覚の觀念の原因であることは否定され、「視覚の直接対象は、離れたところにおかれた事物の觀念でもなければ類似物でもない」（44）といふになる。「の」とか「原理論」での全面的な「非物質論」の展開に先立ち、バークリーは『視覚論』で「視覚の非物質論」を示したと記される<sup>(14)</sup>。

視覚と触覚がお互いに共通する対象を持たないといふとかく、視覚対象は不可触であり（95, 129, 135）、触覚対象は不可視となることになる。バークリーの言葉では、

正しくかつ厳密な言い方では私は距離それ自身も、また、離れたところにあると私が思っているよりなにも何も見ていないのである。つまり、距離も離れたところに置かれた事物も、それら自体あるいはそれらの観念も正しくは視覚によつては知覚されていない（45）。

のやおつ、「対題(space)」、「外在性(outness)」、離れて置かれた事物の諸觀念は、厳密に並べば、視覺の対象ではな<sup>二</sup>」(46) のやね。また、距離ばかりで<sup>一</sup>はなく、外的な事物の大きれ<sup>二</sup> (64)、我々が踏みしめて<sup>一</sup>る大地を<sup>二</sup>やべゆ (cf.113) 直接<sup>一</sup>に見ゆ<sup>二</sup>じよせ<sup>一</sup>やな<sup>二</sup>。

しかし、こうした視覚によつては直接知覚できない触覚対象の距離、大きさ、位置は視覚の観念の媒介によつて、この観念をもつて対象を知覚する。

て (by mediation of visible ideas)、つまり間接的に知覚される (11, 121)<sup>(12)</sup>。視覚の直接対象を介して、視覚による間接的な対象である視覚対象を知覚するところに、バークリーは「バークリーは前の論の間に」(suggest) する (45, 50, 53, 54, 57, 73, 74, 103, 130, 135, 138, 142, 144, 145, 147, 152)。

既に触れた「視覚の非物質論」よりも「視覚の因果説」よりももはるに、視覚対象が視覚対象を示唆するものではなく、視覚対象と視覚対象との間に物理的・必然的な関係は存在しない。バークリーは、視覚対象が視覚対象を示唆するものではなく、視覚対象が共に存在するのを経験するところから、おそれ、習慣的な組みつきの結果であり、必然的な関係によるものではないことを強調する (21, 28, 99, 103, 104, 105, 107, 108, cf. 25)。「いへつた視覚対象はすべて心の中にのみあつて、言葉が事物を示唆するものではなく、距離であれ大きさであれ何の外的なものも示唆するものではない」 (77)。

バークリーは、視覚対象と視覚対象との間の習慣的關係を、「記印したものが指示する事物あることは言葉による意味との関係にならぬべし」。

やれど、「視覚に固有な対象」が離れたところにある対象を意味し、我々が示す方法は、言語や人間が決めた「記印の方法を回りこむべし」。ここでの「記印」は、言語や記印で、それが意味する事物を本性上の類似性や同一性によるものであるのではなく、経験によって我々が記印の意味の間に觀察してきた習慣的な組み立てのみ示唆するかのうだね (147, [ ] 内書き)。

したがつて、ヤリマー問題（132）<sup>(16)</sup>が想起される人物、すなわち、田が不自由なまま育った後に開眼手術を受けて新たに視覚を獲得した者が初めてものを見る時点では、視覚対象と触覚対象との結びつきをまだ学んでいないのだが、「最初、視覚によつては距離の観念を持たぬことおのづか。太陽や星々とこの最も遠い事物も、もつと近くにある事物と同様に」すぐさま自分が自分の眼の母、ここへよつて、自分の心の母であるものが見られるだらう（41）。しかし、「自分が見たもののどれも高いか低いか、出立つてこぬかし難べり」とせなこだらう（95）。これがいじとなる。やひに、彼は視覚対象から触覚対象の大きさも形も数も知るじではない（104, 105, 108）。やれどいじのか、彼が視力を回復した当初は視覚対象が未分化の状態で、あれこれ具体的な事物を認識するまじや（110）、対象の運動の方向を言ひやといへどもな（137）。

「」まじめのところでは、『視覚論』を「我々による『空間』の観察は、あつたく視覚的ではなく、我々の過去の経験の間に視覚刺激と連合した運動感覺的な記憶像から成り立つ」<sup>(17)</sup> ところの議論のひとつとみなすのが自然である。しかし、経験主義的な心理学といつ流れ（その一つの頂点が、奥行知覚は奥行のない色の感覚（depthless sensation of color）が印された手がかり（clue）を解釈する）<sup>(18)</sup> もう一つ邊はれるとこへ、ヘルムホルツによる無意識的推論の理論であると詰められる<sup>(19)</sup> の源流にバークリー『視覚論』を位置づけたくなるのももうひとつの思われる。

連合説による視覚論では、距離 $\parallel$ 奥行と一次元の視覚像 $+$ 距離 $\parallel$ 三次元の視覚像という二つ

の図式が想定せられてこらへる所で誤ねれぬ。距離 = 奥行 せ、触覚対象の距離と視覚的な奥行との区別せり回し視する所じとおほく。一次元の視覚像 + 距離 = 三次元の視覚像 ところの足し算の方は、奥行を欠く一次元の平面的な視覚像に、触覚を通じて経験された第三の次元である距離の觀念が付加せられることになりて、我々が現に田に立つてゐる、奥行を欠んだ三次元の視覚空間が見えるものとなる。これが現れる所にて、われらの想定に立ちて、前章で示した『視覚論』第2節における「距離せんれ四体直接には見えぬ」といふのがだらな」が、視覚の直接対象は奥行きの三次元を欠いた一次元の平面的な視覚像であるところの意味になら。

ロ・ニ・マークストローハウゼン、今触れた、「距離せんれ四体直接には見えぬ」といふ所にて「視覚論」の全議論が凝りつく所(2)、「直接に見る所のものは一次元の空間的な場 (two-dimensional spatial field) やたわゆ『光と色』が」一次元間に配置され、「平面像」と呼ぶれりといふやうなものを構成する」(3) と述べておる。やむとく「やがて我々が視野 (field of view) から、こねば『奥行を取つ所』 (remove depth) なうせ、我々は一次元の視覚の直接対象が残られるのせ留出に限ねぬ」(4) ところである。また、ロ・ルックチャーカーも、「視覚的な現れ (visual appearances) は三次元が欠如してゐるところからいへば、視覚的な現れが全くの一次元であるといひ」とが腰痛である。(5) と述べてゐる。われらの論者がこのものより、一次元の視覚像 距離 = 一次元の視覚像 と結んでゐる所である。先の一つの想定にて『視覚論』第2節を理解してゐるからである。

たしかに、パークリは、距離を取るに出来ない（2）と云ふ、視覚の直接対象は距離をおこたといふのとあるものが可視化（50）と云ふ一カド、距離以外の、事物の大それや形なしの延長や運動は視覚と触覚の二す

れにや備わつてゐるものゝ體ひトコロ（54, 55, 104, 105, 121, 133, 137, 139, 140-3, 152）。つまり、視覚の直接対象には距離トコロ第IIIの次元だけが欠けてコロもと見ゆる所ド根拠（<sup>33</sup>）。

しかば、アーノストロハグ田舎も注意する所ハリ、バークワは視覚対象が「一次元である」とせり、やつせ體ひトコロな（<sup>34</sup>）。やれどいわが、バークワは、立体（三次元）の觀念が平面（一次元）の觀念に先立つじを認めて、「幾何学的平面の觀念を形作るためには何かの距離の觀念が必要である」（155）と申す。やつて、

體ひとおかねばならないのは、人々が、立体（solids）が視覚の直接対象ではないと認めておきながら、平面（まつまね形）（flat or plain figures）は視覚の直接対象だと考へたくなむいふじを（157）（<sup>35</sup>）。

……平面は立体同様に視覚の直接対象でせぬ。厳密な意味で我々が見るの立體ではなつて、やがて形に染ひれた（variously coloured）平面でもな（158）。

やや遙ぐトコロ、アーノストロハグは、田舎自身が視覚の直接対象であると理解してコロ「一次元的な多様体」（two-dimensional manifold）と、バークワが解釈したコロ「平面」とは、やがてこらが異なるものだつて、この証明をつかつたトコロ立派解釈上の問題は生じなつてコト（<sup>36</sup>）。

しかし、いとせりねだけではあるまじ。バークワの論述の仕方には注意が必要なのである。たしかに、既に触れた所ハリ、例のヤツスキー問題の主人公のような人物が最初から視覚によつて距離の觀念を持つじふと不當で

視覚機能(visual faculty)において本来知覚されるものすべては、さまざまな属性の光と陰を伴つて変化する色でしかない。けれども、このした視覚の直接対象は、絶え間なく変化し移りつゝもので、幾何学的な图形のよひな方式で扱つことはできないし、そのよひに扱つても少しも役に立たない。(156)

と言われる。結局、視覚の直接対象は「光と色の混沌」とも呼ばれるべきものであつて、一次元でさえもないのである。

もちろん、視覚対象が「一次元の視覚像である」とが仮定されたからといって、連合説による『視覚論』解釈が否定されたことにはならない。ところのも、この段階では、「光と色の混沌」が触覚対象の形や大きさ、位置関係や距離と連合することによつて、視覚観念に付加され、視覚を通じて知覚されるようになると思つてしまつてゐるからである。しかし、次に示すよひに、さらに深刻な問題が連合説による解釈にはある。

既に触れたように、バークリは視覚と触覚に共通な觀念があることを如辯つて云ふ（127, 129）。視触共通觀念の假定は、視覚を通じて第一次性質の觀念が心に持ち込まれるといふ表象説の假定である（130）。「視覚立つの光と色の変化だけでなく、なにかそれより多くのが知覺されり」（ibid.）この割合の方の例として、ロックが視覚を「我々が持つすべての感覺のいわば最も包摂的であつ、光と色といひの感覺にのみ特有な觀念を持ち込む。そして、空間、形、運動といへばぬかに異なる觀念もまた持ち込む」（『人間知性論』第27章、第9章、第9節）と述べてゐるのをバークリは承認して（130）。ロックは反対して、バークリは、視覚を通じて視覚以外の觀念が入りこむとするのは、「一切の色を含むたゞ抽象的な形や延長を取て描く」とがである（同上）等としている（ibid.）。つまり、表象説が想定する通り、「我々は自分たちが触れるのと回の延長、同じ形を見て云々」（48）のであれども、視覚対象から一切の色を排除してもなお、視覚的ではない延長や形が残らなければならぬことこの间的に論じ闡するバークリの主張であると判斷される。

以上の、バークリが表象説を破壊するために提出した視触共通觀念の假定は、連合説による『視覚論』解釈とが抵觸するのである。先の二つの想定（前章）にしたがえば、視覚上の奥行と触覚上の距離は共通であつ、距離が視覚対象に付加されるよりもより奥行が見えてゐるのにならぬ。つまり、触覚上の距離が視覚対象に含められてゐるところである。

また、表象説にせよ、連合説にせよ、視覚対象に含まれる触覚の觀念が見えてゐることの、視覚の

観念中に触覚の觀念が、こねば「提示」されてこぬのであって、『視覚論』の論へ、触覚の觀念が視覚の觀念によつて「示唆」されるにせぬか。ところのも、以トに説明を試みるより、「XがYを示唆する」とバークリが言つ場合、XとYとの間に共通なものは含まれないからである。

バークリが視覚の機能と言語の意味作用との間にアナロジーを認めてこむことに既に触れた。實際、視覚のモデルとして言語がしはせ持ね由れば（17, 20, 32, 51, 64, 73, 77, 144, 147）、『視覚論』の結論も、「視覚に固有の対象は自然の造物主（the Author of nature）の普遍言語を構成す」（147）といふものである。音声であれ文字であれ、言語が記号として有意味であるため、その意味・指示対象を（文字通りの意味で）命んでいる必要はない、前者と後者の間になか共通な要素が必要なわけでもない。「赤」という言葉が赤い必要は全くない。

言語以外にも、バークリは、他人の感情がその人の顔色を記号として知られる場合を例に挙げて視覚を説明する。

我々は、距離を見るよひじて大きさも見る。そして、我々はその両方を、我々が人の姿に羞恥心や怒りを見ると同じ方式で見る。それらの感情 자체は不可視である。それにもかかわらず、それらは顔色や表情の変化とともに眼によつて取り入れられる（65）。

この「視覚の感情モデル」とも呼ぶべき例でも、恥ずかしさで赤面したときの顔の色が羞恥心を意味するのに、後者が前者に含まれたりはしない（cf. 9, 10, 23）。IJのように、言語と感情とこれら二つのモデルは、「XがYを示

唆する「あることは「YがXを通じて（間接的に）知覚される」とこの場合は、XがYを伝へたのはこなこいことを示す。

わいし、家中にいて外を通りの馬車の音を聞く場合を例に、視覚と聴覚とを比較してパークリは、

音(*noise*)の変化によって私は馬車のやがておな距離を知覚し、表を見るよりも前に、それが近づいてくることが判る。このよひにして私は、眼によつて距離を知覚するのとは別に同じ方で耳によつて距離を知覚するのである（46）。

と書いた。しかし、これに続く節では、

にもかかわらず、私は距離を聞く、と書いたのと、私は距離を見る、と書いたのは似た言ふ方ではない。ところでも、視覚の観念が触覚の観念と混同され易いほどには、聽覚によつて知覚される観念と触覚の観念とは混同され易くないからである。それゆえ、人は同じようにして、物体や外的な事物(bodies and external things)が聴覚に固有の対象ではなく、音だけがそうであり、これを媒介にしてあれこれの物体、距離が自分の思考に対して示唆されるところにこそ容易に納得するのである（47）。

じ注意している。触覚の観念を示唆する方法は視覚、聽覚どちらでも同じであるが、聽覚に固有な観念である音

に触覚の観念が含まれていないことは容易に納得されるのに、視覚の観念に触覚の観念が含まれていないことを納得するのは難しいということである。もしも、視覚の観念が触覚対象を示唆するに際して、前者に後者の観念が含まれているのであれば、触覚の対象を含まない聽覚の観念によって触覚対象が示唆される聽覚と方式が同じであるとは言えなくなる。

このように、視覚と触覚に共通な観念の存在が否定されていることからも、また、「示唆」という語の用法からも、視覚対象はなんらの触覚の観念も含まないことが示される。そして、この点を認めるならば、奥行を欠いた二次元の視覚像が触覚に属する距離を含むようになることでも（もしくは、触覚の観念を一切含まぬがゆえに光と色の混沌でしかない視覚対象が、さまざま触覚の観念を含むようになつて）、三次元の視覚像が生まれるという連合説による『視覚論』解釈を探ることはもはやできない。

前章までの議論によつて、パークリの視覚理論を連合説として理解することには大きな困難があることを示すことができたと思われる。しかし、これに対し次のような問題が指摘されるかも知れない。つまり、連合説による『視覚論』解釈において想定されていると思われる二つの図式のうち、二次元の視覚像 + 距離 = 三次元の視覚像の方は、それを光と色の混沌 + 触覚の観念 = 三次元の視覚像と修正しても成り立たないであつが、もう一方の 距離 = 奥行については、まだその可能性が完全には否定されていないのではないかといつ反論で

ある。ところでも、パークリ自身は「触覚上の距離を示唆する視覚上の奥行がある」と、せつめいせつていないので、触覚上の距離が視覚上の奥行として視覚像中に現れるという連合説から離れて、「距離はそれ自体直接には見ることができない」（2）と言われる場合の「距離」という語が触覚上の距離だけでなく視覚上の奥行をも指しているという解釈が可能だからである。言ふ換えると、理由は何であれ、パークリが距離についてだけは、視覚上の距離、触覚上の距離といった区別を設けていない可能性が残っているのではないかといひである。もちろん、この場合、視覚対象が奥行を含むことは否定され、我々が現に見てこ（と思つてこ）る奥行は幻覚の類になつてしまひ。この問題には次のように答へるにいたしたい。

まず、問題の第2節に述べられてこる「距離」、すなわち、「眼に向かつて真つ直ぐに引かれた線」が触覚対象であることは、それこそ『視覚論』のすべての読者が同意するであろう。この節は、細かな異同をのぞけば、ほぼそのままモリヌーの『新屈折光学』にあることが知られてこるが（<sup>27</sup>）。モリヌー自身は「のよつな線を「物質的な線」（material line）と呼んでこ（<sup>28</sup>）。また、『視覚論』においても、これが、幾何光学でこらの視軸（optic axis）や（視覚対象ではなく外部から眼に送はれてくる）光の経路に重なる」とが読みとれる。

既に触れたように、パークリは、三次元の知覚が一次元の知覚に先立つことを認めている（155°。やくも）、

我々は立体を見るのと同じ方式で平面を見るのである。ところでも、両者は等しく視覚の直接対象によつて示唆され、そして、それに応じて視覚の直接対象それ自体が平面や立体と呼ばれるのである（158°）。

部分で、

（三）新編の「新編」は、新編の「新編」である。

と述べている。——示された、地面からの距離や一点間の距離が、第2節にある、眼に向かつて真っ直ぐに引かれているために、たとえ見えたとしても一点にしか見えない触覚上の距離と異なることは明らかである。されに、

視覚と触覚という二つの別個の領域は別々に、それも、距離や位置といつもでは、視覚対象と触覚対象がお互いにいかなる交渉もいかなる類の関係も持たないかのよひに考察されるべきである（115）。

と言われていることから、触覚上の形や延長を示唆する視覚上の形や延長があるのと同様に、触覚上の距離を示唆する視覚上の距離、すなわち、視覚の直接対象としての奥行があると考へて問題はないと思われる。そして、問題の第2節が否定しているのは、やはり、触覚上の距離が直接に見えることであつて、視覚上の距離である奥行が見えることを否定しているのではないと考えるべきである。

既に、連合説による『視覚論』解釈がもつ問題点を指摘するという本論稿の目的を達することができたと思われるが、もう一つ簡単に触れておきたい問題がある。それは連合説によらない『視覚論』解釈の可能性である。

「況々せ、「光と色の異次」（156）でしかない視覚対象が、このものにこゝで、触覚対象とは別種、別個な、形、大きさ、組合せを持ち（49, 102, 110, 111, 127, 137）、対応する触覚対象と同じ名前で呼ばれる（49, 55, 121, 127）ものになつて、つこゝせ、「非離立様ではあるが、相互通に十分分離してて判明な視覚対象を同時に知覚すれり」とがである」（145）立派のか、が今度の問題である。

先にも触れた、開眼したばかりの人物が田の前に立つ他の人を見たとき、後者が正立してこゝか倒立してこゝのかの判断が前者につくかといひかといへ、モリスー問題と同様の思考実験を議論するなかで、パークリは、この人物が

……はじめて視覚をはたらかせたときじ、視覚の觀念を他の人々がするのと同じよつた別個な集まりに括り玉か（parcel out）じとはないだらけ。ところのや、他の人々はじれどじれが通常は共在（coexist）してて、一つの以前のもとに一緒に束ねられる（bundle up）のがふさわしいかを経験してきたからである。……彼の心には、見えてこる人間を構成する觀念が、同時に知覚される他の視覚の觀念すべてと共に押し入つてくる。しかし、彼が自分の視界に一度に提示されたらねらかべての觀念を種々別個の組合せへと振り分け（distribute）ものになるのは、その人間の部位が動くのを觀察するといふ他の経験によつて、じれどじれが分けられぬくもどおり、じれどじれが一緒に集め（collect together）ぐれどおののかを知るよりにならむといつ時が来てからである（110）。

パークリ『視覚論』は連合説か？（原）

じ述べてゐる。リリードは、最初はカオスであった視覚の觀念が分節化し体制化するに至り、コスモスとしての視覚像へと変化し始める。したがって示されてくる。したがって示された分節化と体制化に平行して、視覚対象と触覚対象との共在が両方の感覺を通じて知覚されるところの経験から、両者の間の対応関係が学習され、やがては、視覚対象が触覚対象の記憶となり、前者が後者を示唆する。したがって、手の匂かないことによる触覚対象についても視覚において知る。これがでもある。これが、『視覚論』における知覚学説のシナリオであると思われる。

このシナリオに基づく『視覚論』解釈（仮に「分節化と体制化による解釈」と呼ぶことにする）を、ゲンコタルト説<sup>(29)</sup> やギフンの達の分化（differentiation）の理説との関連をも含め、「心理学説としての論議」<sup>(30)</sup> は、本論稿の議論の範囲と論者の能力を超えてくる<sup>(31)</sup>。ただ、「分節化と体制化による解釈」が、視触共通觀念の否定と抵觸しないことがなることを指摘しておきたい。

## 註

バークレーの「トキスト」<sup>(32)</sup> *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne, 9 vols., ed. A. A. Luce and T. E. Jessop (Edinburgh: Thomas Nelson and Sons, 1948-57) (Works ト監訳)* を用いる。

バークレー『視覚論』 Berkeley, George. *An Essay Towards a New Theory of Vision* (1709) (*Works*, vol. 1, 1948) (ト慈信輔他訳『視覚新論』 動草書院、一九九〇年) から原文照用するが参考箇所の括弧は翻訳脚注もつておらず、『視覚論』以外のバークリーの著作につれてセクトの監訳を用いる。

PHK: *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, Part I (1710) (*Works*, vol. 2, 1949) (『視覚論弁明』前掲『視覚新論』人知原理論』昭文庫、一九四八年)

TVV: *Theory of Vision Vindicated and Explained* (1733) (*Works*, vol. 1, 1948) (『視覚論弁明』前掲『視覚新論』所収)

バークリ『視覚論』は連合説か？（原）

- (一) James J. Gibson and Eleanor J. Gibson, "Perceptual Learning: Differentiation or Enrichment?" *Psychological Review* 62, no.1 (1953): pp. 32-41.
- (二) Ibid., p. 33.
- (三) Ibid., p. 34.
- (四) John Stuart Mill, "Bailey on Berkeley's Theory of Vision," London: *Westminster Review*, 38 (1842), p. 320. Rpt. in *Berkeley on Vision: A Nineteenth-Century Debate*, ed. by George Pitcher, New York: Garland, 1989.
- (五) Ibid., p. 322.
- (六) Ibid., p. 320.
- (七) Ibid.
- (八) Ibid., p. 328.
- (九) Ibid., p. 320.
- (十) Ibid., p. 321.
- (十一) バークリの「眼の視覚が象るし得る光」は、視覚の原因としての光の「近づけられること」と「離されることは」の二つである。
- (十二) 「眼の外に現れるもの」（being without the mind）と「距離を離れてゐる」（being at a distance）が互換である。
- (十三) 「視覚論」に記載される、「心の外に現れる」（being without the mind）と「距離を離れてゐる」（being at a distance）が互換である。（41, 43, 50, 55, 95）である。
- (十四) Colin Murray Turbayne, "Berkeley and Molyneux on Retinal Images," *Journal of the History of Ideas* 16 (1955), p. 340.
- (十五) ただし、距離の極めて近い距離における事物は「距離を離れてゐる」（being at a distance）と「距離の感覚」（distance perception）との間の誤りがある。距離の感覚（27）における視覚以外の觀念が挙げられる。
- (十六) Locke, John. *An Essay concerning Human Understanding*, ed. P. H. Nidditch (Oxford: Clarendon Press, 1975), Blk. 2, ch. 9, sect. 8.
- (十七) (大英翻訳版『人間知性論』訳序文) 一六七一—一七一七世)。
- (十八) Hochberg, J. E. *Perception* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1964), p. 39f. ( 田中忠久訳『知覚』訳序文) 一九六九年)。

パークリ『視覚論』は連合説か？（原）

- ホラホバークは曰く、「我々がいにふる」空間、大それ、物体性(solidity) などのはじめの属性は、この現象の発達の過程でおもむろにひだり、バークの今や伝統的な仮説（ibid., p. 42）へと飛ばしてしまった。
- (18) Gibson and Gibson, p. 32f.
- (19) Armstrong, D. M., *Berkeley's Theory of Vision: A Critical Examination of Bishop Berkeley's Essay towards A New Theory of Vision* (Melbourne: Melbourne University Press, 1960; New York: Garland, 1988), p. 2.
- (20) Ibid., p. 5.
- (21) Ibid.
- (22) Pitcher, G., *Berkeley* (London: Routledge & Keagan Paul, 1977), p. 8.
- (23) Colin Murray Turbayne, *The Myth of Metaphor*, Rev. ed. (Columbia, S. C.: University of South Carolina Press, 1971), p. 128.
- (24) Armstrong, p. 5.
- (25) cf. Locke, ibid.
- (26) Armstrong, p. 6.
- (27) Molyneux, William, *Dioptrica Nova* (London: 1692), p. 113. cf. *Works*, vol. 1, p. 171, n. 2.
- (28) Molyneux, Admonition to the Reader, *Dioptrica Nova*.
- (29) 諸君也『視覚論』おなじマニフェストのモルトコ（X suggest Y to Z）の圖形はZ perceive X as Y すこへ圖形を換へて）據るよりこの話おおせりはだりいがおなじ。這裡“God Speaks to Us in the Same Divine Language,”（『神が人間語』第14回「聖詠大祭司抄」一九〇叶（一）（11））。
- 『視覚論』の心理学説的位置（カントン）が記述『視覚新論』（福澤）の論調の「人間あるし條悟難比である」「解説バーカンの現代の視知覚論（『視覚新論』pp. 225, 275）が詳しき。」上「解説」せ「経験論（即説、神経説）」の「幾何学的」の心理的側面との不整合（即ち注意しておらず、本論稿の執筆にあたつては）、「バークの究極的な標榜は、触覚を含めた現象（觀念）」元論において、知覚の対象表象図式を規定するところの「二元論」（p. 255）
- 上半段の「物理的」の「物理的因果論」立場の「心理論説」が「バークの原理をもれなく論議しつつも、対象表象図

## バークリ『視覚論』は連合説か？（原）

「一方的に知覚するのではなく、これらは結果にならなかったのせむハコト也」(ibid.) これが題にや、「知識・意味・推論・判断」 = 知覚 (p.237) これが図示なしの紙で解説を取った。

感覚素材 + 経験上無い  
(細胞科 幸徳勲講義)

パークリ『視覚論』は連合説か？（原）